

政変追い打ち、 全土で休校続く

—— 出稼ぎの児童労働も急増か

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
ミャンマー事務所所長・市川 斉さんに聞く



いちかわ ひとし
市川 斉さん

静岡県出身、59歳。1990年、シャンティに入職。内外の緊急救援・復興支援にかかわる。アフガニスタン事務所長、常務理事などを経てミャンマー事務所長。ジャパン・プラットホーム副代表、国際協力NGOセンター副理事長を歴任。昨年11月、公益社団法人日本看護協会などによる「ヘルシー・ソサエティー賞」（ボランティア部門【国際】）を受賞。

新型コロナウイルスの世界の感染者は2021年1月27日に1億人を突破した。死者も、200万人以上にのぼっている。地球の人口が約77億人だから、実に77人に1人は感染している計算だ。とりわけ懸念されるのが、政情が不安定で、情報の乏しい発展途上国の子どもたちだ。新型コロナウイルスは、未来を担う子どもたちに、どんな牙をむいているのか。（平田篤州）

インドシナ半島の西部に位置するミャンマー。日本の約1・8倍の国土に、5400万人が暮らす。ビルマ族をはじめ、130以上の少数民族からなる多民族国家だ。50年以上続いた軍政が10年前に民政に移管し、アウンサン・スーチーさんが国を率いていたが、2月に、国軍がクーデターを起こした。

一斉休校

全国の小中学校は、コロナの襲来によって、新学期が始まるはずだった昨年6月から一斉に休校、一度も開校していない。昨年7月に一度開校した高校も、8月下旬から感染が拡大し、約1か月で休校になった。

約4万7000の小中高校が、機能不全に陥っている。児童や生徒を、どう処遇していくのか。1年、進級を遅らせるのか。

「教育省（日本の文科省）に聞いても、再開のめどは不明。スーチーさんの判断になる、という観測もあったが、スーチーさんは拘束された…」

最大都市のヤンゴンにあるシャンティ国際ボランティア会ミャンマー事務所の現地スタッフらは、困惑しているという。

ミャンマー事務所長の市川斉さんは、所長として2019年7月に赴任したが、昨年4月中旬、現地の感染拡大によって一時帰国。その後、ミャンマー国際空港の閉鎖が続き、戻れなくなり、東京の本部で勤務している。

「何とかミャンマーに戻りたいのですが……。現地とは、リモート会議で連絡を取る日々です」

脆弱な医療体制、厳しい規制

ミャンマー大使館によると、2月4日時点では、累計感染者約14万人、死者約3000人。昨年10月から12月下旬までは連日

1000人を超える感染者が報告されたが、今年2月に300人前後に。とはいえ、ヤンゴンのセミロックダウンは続いている。

ミャンマーの医療体制は、極めて脆弱だ。だから、政府の対応は、日本より、はるかに厳しい。

昨夏からセミロックダウンになったヤンゴンでは、外出が制限され、街のいたるところに警察官が立った。30人以上の集会を開いたら、逮捕。往來も厳しく規制され、大阪で例えれば、梅田から難波に移動するのに、許可証が必要だ。

昨年秋の時点で、現地スタッフは、次のように話していた。

「全感染者の半数が、ヤンゴン。ヤンゴン名物の交通渋滞は消え、お店の販売は、持ち帰りだけ。ゴースタウンのようです」

次のような報告も。スタッフが住んでいた12世帯が暮らすアパートで、感染者が出た。すると、すぐに警察官が来てアパートの周りに黄色いテープを張り巡らせて、完全にロックダウン。スタッフは2週間、アパートに閉じ込められた。

「ただ、ミャンマーの社会がすごいのは、助け合いの文化です。隔離された人に、近所の人が食糧をどんどん差し入れます。うちのスタッフも、ひもじい思いをすることなく暮らしました」と市川さん。

1月18日時点の近況報告は、次のような内容だった。

「引き続き、ロックダウンは続いているんですが、市民は自由に動き始めた」。そして政変後の2月。表向き静かだが、今後どうなるのか。

輸血用の血液、自己責任で

ヤンゴンから北西約260キロ、約25万人が暮らすバゴー地域のピー県にも、ミャンマー事務所がある。バゴー地域でも、2月4日時点で3000人が感染している。

「ミャンマーでは、輸血用の血液も自分で集めなければならない。今までだったら、緊急時はバンコク(タイ)に飛べば、なんとかなった。一時間ぐらいなので、東京から大阪に行く感覚です。今は、それができない」

昨年12月4日午前1時2分、日本人会に緊張が走った。

「緊急輸血が必要になりました。健康で体格のいいO型RH(+)の3人の邦人男性の献血が必要です。明日の仕事に支障のない範囲で、ご協力よろしくお願ひします」

LINE、メール、FAXで緊急のお知らせが回った。1時間後、めどがついた。

「外国人にはきついですよね。日本人の6、7割はミャンマーを出たと思います」

市川さんは、こう話した。

夜に働く男子

昨年12月の夜。スタッフがピー県の、ある街のレストランに入った。すると、10歳ぐらいの男の子が働いていた。近くの村から来ているという。

— 夜に働いているの

「このレストランは、泊まらせてくれるので」

— お父さんは

「建設現場で働いている。でもコロナで収入が少なくなって…」

— 学校は

「閉まっている。ぼくが働かないと、生活費が足りない」

市川さんは、次のように言った。

「コロナ禍で、多くの親が失業していると思われていますが、その実態は表にはあまり出てきません。男の子のように、労働を強いられている子どもたちは多いはず。ミャンマーの国民性は相互扶助の面も強く、労働者の権利を守る法整備も、十分とは言えません」

情報隔離

スマートフォンは、田舎でも普及している。でも、大切な情報が伝えられているかどうかは疑問だという。停電が多い。医療は大丈夫なのか。コロナ対策への要望は…。市川さんは、「情報の隔離」が心配されるという。

ミャンマー政府は、今年4月下旬にもワクチン接種を始めるとしていたが、政変によって不透明な部分も出てきた。

ロヒンギャ難民や民族紛争なども抱えている。スー・チー政権は「教育=暗記」という、自国の教育観を抜本的に変え、生きる力を培う国家教育戦略を本格化する構えだったが、どうなるか。

「何とか教育改革が進めばいいのですが。子どもたちの未来に、希望を灯してほしい」。市川さんは今、祈るような気持ちでいる。

「本の力を生きる力に」を理念にしたシャンティの活動は、「1丁目1番地」の支援だ。子どもたちの英知を育み、想像力を培い、生きる糧にもなるはずだが、コロナ禍と突然の政変で、「拒まれる危機」が目前にある。

シャンティ国際ボランティア会

1981年12月10日設立。本部は、東京都新宿区大京町31・慈母会館。スタッフは約160人。「シャンティ」は、サンスクリット語で「静寂」「平和」。アジアの6か国で教育支援や緊急支援を実践。約400の学校と約900の図書館を建設▽約33万冊の絵本や児童書を配布▽約3万人の教員や図書館員の研修—などを行い、移動図書館もサポートしている。



シャンティが配本などの支援をしている学校図書館で、絵本を読む子どもたち(ミャンマー・ベグー郡)。今はコロナ禍で、支援もスムーズにはいかない